英語科

The Giving Tree をめぐって
——New Horizon より——

三小田　博昭

【抄録】NEW HORIZON（東京書籍）では３年間の英語教育、一番最後の LESSON として、教科書に載せている THE GIVING TREE（Shel Silverstein）から生徒がどのようなことを感じとり、学んでゆくのか。その実践報告と生徒の反応を調査し、まとめたものである。

【キーワード】木と少年、母親、友人、親子、家族、自然

１．はじめに

中学３年生の教科書の最後に、名作鑑賞としてこの「THE GIVING TREE」が登場して、数年が経過するが、この作品を学ぶ中学３年生が、実際に何を感じ、何を学び取るかを調査、探究してみた。高校受験が実質的にはない本校の中学３年生が、自分を顧み、自分の生活と比較してみた結果が、この作品に対する彼らの考え、感想に反映していると考える。

その感じ方が、本作品の作者である Shel Silverstein の意図、もしくは、数々の研究結果とは異なるものになるかもしれないが、その点はご容赦いただきたい。

これを始めるにあたっては、教育学部の小嶋教授が私に動機づけをして下さったことによる。小嶋教授には、実際、中学生の授業にも参加していただき、授業に対するご助言をもいただき多いに感謝している。

２．ねらい

生徒に本作品の日本語版を自由に作成させることにより、この作品を通して、中学３年間、ないしは15年間活生きてきた生徒たちが、木と少年の関係をどのようにとらえるのか。また生徒たちが、この作品からなにを学び取ったのか、を考察し、義務教育最後の年の最後の LESSON が果たす役割を考えたい。

３．指導過程

１．〔１時限目〕

(1)　本章にあらわれる、New Words の確認

(2)　本章の教師による朗読

(3)　本章の生徒による朗読

(4)　教科書にある絵だけを印刷したプリントを各グループ（４名）に配布する。２クラス全20グループで構成

(5)　作業の説明

(6)　作業

２．〔２時限目〕

(1)　作業

３．指導上の留意事項

(1)　本文の直訳に縛られない、自由な発想による物語作り

(2)　色を塗り、子供向けの物語作り

(3)　グループのひとりひとりが、部分部分を役割分担するのではなく、物語が、まとまりのあるものとして完成すること。

として、できるだけ生徒たちの自発的な発想を重んじることとした。また事前に教室全体で日本語に直してみるという作業もしないし、生徒からの質問も本当に作業上必要なことのみに答えることとした。

４．生徒の活動のまとめ

１．タイトル

各グループに自分たちの物語に見合った題名を考え自由にタイトルをつけさせた。そのうちのいくつかを紹介したい。また表紙絵も自由作成とした。表紙絵も自由に色をぬらせてみた。教科書の絵をそのまま用いているグループもいたが、それとはかけ離れ、自分たちで、考え、工夫して描いたグループが多くあったことに中学生の創意工夫の意欲、他のグループとは違ったものにしたいという考えがうかがわれた。ここに生徒のいくつかの作品のタイトルと表紙絵を紹介する。

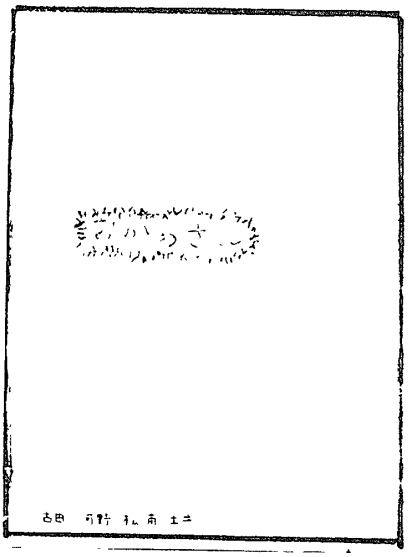
- おおきな“き”とぼく
- 私をあ、げ、る。～木と人間のはかない恋～
- おくりもの
- 木のねがい
- おかあさん
- ははなる木
- FRIENDS　ともだち

Tree
き

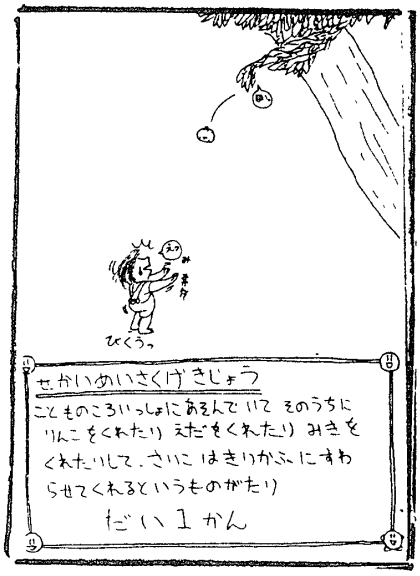
大きな木
と
小さな男の子

はなる
木

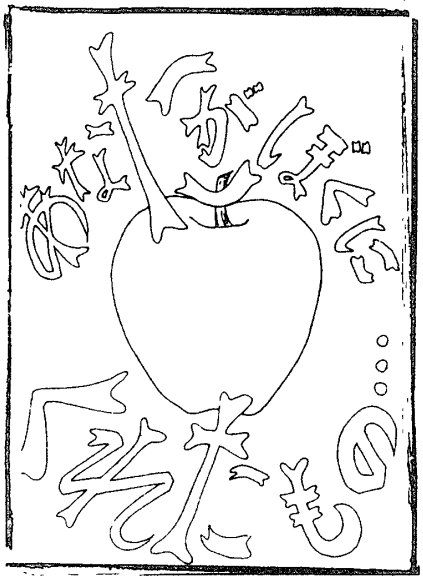
おおきなき
と
ぼく

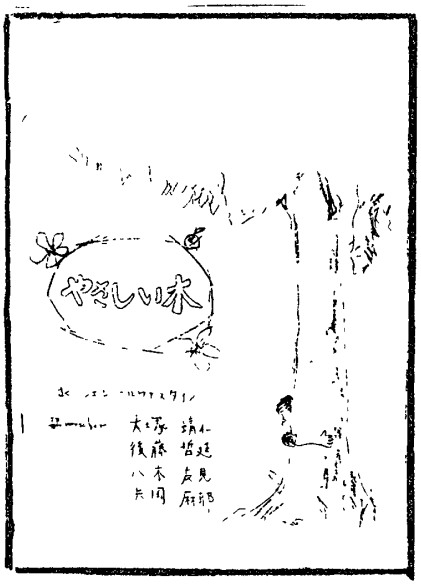


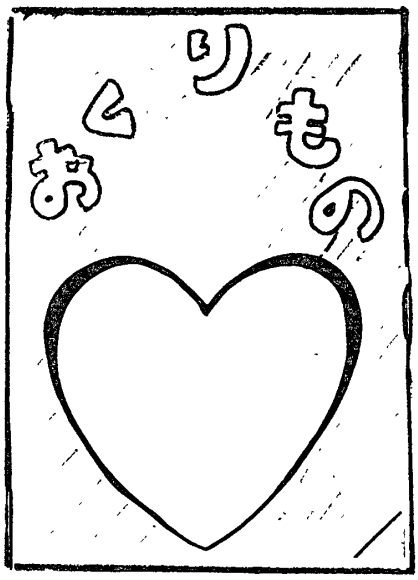
THE
GIVING TREE


せかいめいさくげきじょう
ことものころいっしょにあそんでいて そのうちに
りんごをくれたり えだをくれたり みきを
くれたりして、さいごはきりかぶにすわ
らせてくれるというものがたり
だい1かん

FRIENDS
ともだち







・あなたのためなら
・やさしい木　　など

このタイトルから注目してみたいことは、“木”を“木”としてみているもの。“母”としてとらえているもの。それに、“友達”としてとらえているもの、といった大きく３つに分類できる。そこで次の項目で各グループでは、この“木”と“少年”の関係をどのようにとらえているのかを調べてみることにした。

２．“木”と“少年”の関係（数字はグループの数）

母親と息子	7
友達同志	3
木と少年	3
親子関係	2
家族関係	1
自然と人間	1
無回答	3

以上のような結果があらわれ、“木”を母親ととらえるグループがもっとも多かったが、中には、母親に限定せず、父親をも含めて考えられていたり、さらに構成人員を増やし、家族としてとらえたグループもあった。中でも興味深いのは、自然と人間の関係だとしたグループがあったことである。そのグループのコメントを引用したい。

『こどもの頃の木は、人類でいう昔の人間と自然の関係だと思います。人は利益というものをあまり考えず自然と共存するというレールの中で仲良く生きていくありのままだと思います。人間は自然とたわむれ、自然は自然のたくみをあたえてくれます。

しかし、時がたつと供に、人間は己れの欲だけを考え他の動物や植物のことは考えなくなったことをいっているのだと思います。己れの欲のためなら、大切な自然を破壊して、「人間の発展」しか考えず、それが物語では木の実をとって売り、家をつくり、舟を造ったりしたことだと思います。

でも最後に人間は自然に帰るということで、切り株だけになってしまった木に老人となった人間が木に帰ってきたということを言っているのでしょう。もしかしたら、違って、自然を破壊し尽くした人間も滅びるしか道は残っていない。だから人間は自然破壊などはやめ、自然と共存できる社会を造るべきだと作者は言っているのかもしれません。』

と述べられている。このグループは「木のねがい」というタイトルを本文につけている。

また、“木”を“母親”ととらえたグループの意見を紹介してみたい。

『「The Goving Tree」は、１本のリンゴの木と少年の交流を通して、愛のありかたを問いかける美しい作品です。この原作者シェル、シルヴァスタインはリンゴの木を「ｓｈｅ」（彼女）ととらえていますが、これには一体どんな意味があるのでしょうか。そして愛とはどうあるべきなのでしょうか。この男の子はリンゴの木を信頼し、時にはあまえ、リンゴの木にはそんな男の子がかわいくてしかたがなかったでしょう。そんな気持ちには、男の子がどんなに大きくなっても変わることがなく、まるで母親のように男の子を助けるのでした。ここに作者がリンゴの木を「she」ととらえたのではないかと思います。また、男の子の願いが、自分自身をけずろうとも、男の子が満足するならそれで幸せだという心の豊かさ、それが本当の愛ではないでしょうか。つまり、思いやることが愛で、愛す

ると心が豊かになり、愛するということは幸せになるということです。しかし、残念ながら、現代社会にはあまり愛が存在していないような気がします。自慢の子を必死で育てる親、それにうまく従って行く子ども、くさりで縛りあった恋人、生きるための家族……。今一度この「The Giving Tree」を読んで愛というものを見なおして欲しいものです。学校ではあまり教えてもらえませんが、愛こそが一番大切なものではないでしょうか。」このグループはタイトルを「ははなる木」としている。

そして最後に「友達」と名付けたグループはそのコメント『この物語を通して筆者は何を伝えたかったか？私はこの話から優しさを学びました。思いやりを学びました。そして友情を学びました。彼女は男の子に与え続けました。それは自らのリンゴであったり枝や幹であったり最後には休み場所までも与えました。このことはやはり男の子に対する愛情がないとできません。愛情のために何でもなけうつ木の姿勢はたいへん感銘を受けました。』と残していた。

3．本文から生徒が感じとったもの

生徒81名（男40名　女41名）にこの筆者が、読者に語りかけたかったこと。そして、また読者に感じとってもらいたかったことを尋ねてみた。その結果実に興味深いことがわかった。まず、“木”の立場にたって本文を読み取った生徒は、そこからは「愛情」「友情」「母性愛」といった「優しさ」を本文から感じ取っている。その一方で“少年”を中心に考えた生徒からは「わがまま」「いこし」「欲」等を持ってはいけないという「訓戒」めいたことを本文の主体として感じ取っている。また本文から「自然と人間の関係」を読みとった「自然環境」派も若干なからいた。

「愛情・友情・母性愛」・「優しさ」派	36名
「わがまま・いこじ」・「訓戒」派	25名
「自然環境」派	9名
その他	1名
無回答	10名
全生徒数	81名

「優しさ」派の生徒の意見をいくつかあげてみることにする。

『まるで親子みたいだな、この木と男の子の関係、と思いました。一見なんでも欲しがるわがままな息子と何でも与える母親のように見えるけと、とんなに息子は大きくなっていっても結局は母親の所に戻ってくる。親子に絆みたいなものを表しているように思いました。筆者はきっと目にみえない糸を教えようとしたんたと思います。』

『まず、生きものには命があるということを伝えたかったんだと思う。何でも愛情を注けば、必ずお返ししてくれるんだということを伝えたかったのだろう。そして最後まで愛し続けること。お互いに愛しあえばたとえ木でも自分にとって、何か得られるものがあるということを筆者はきっと伝えたかったのだろう。』

「訓戒」派の生徒は、

『いくつになっても、こどもの心、つまり純粋な心を忘れないで欲しい。ということを伝えたかったんだと思う。大人になって遊ぶ心を忘れる程の忙しい大人になって欲しくなかったんだろうと思う。無邪気な心を忘れない大人になりたい。』

『作者はこどもから大人への移り変りをするどく描いている。大人になるにつれ、優しさと思いやりがなくなっていくのが分かる。今のすさんだ世界に今一度そういうこどもの時の「人を思いやる気持ち」を忘れないでと言いたかったのではないか。』

「自然環境」派の感じ方は、

『大人の汚さ、人のことをまったく考えない人間の愚かさを私に強く痛感させた。この文章はまったく今の地球と人間の関係と同じことを描いているように思えた。人間も地球からあらゆるものを奪っている。そのことを改めて認識させられた。』

『こともは自然と一緒に遊ぶ。しかし大人になるにつれて自然から離れてゆく。そのうえ、自然を破壊してしまう。その自然破壊がすすむ今、その事実をこともに教え、自然から離れてしまう大人にならないように筆者は伝えたかったのではないだろうか。もっと自然を大切に考える大人がふえるといいのに。』

といったように、大まかなカテゴリーに分類すると以上のように3つのカテコリーになる。上記の数名の生徒の考えがそれぞれのカテゴリーの意見を集約している訳では決してないが、ほぼ同じ内容のことを言っていると考えてよい。その他の1名は、本文の要約が書かれていたので分類のしようがなかった。次の項目で、それぞれの、カテゴリーの中の様子を探ってみることにする。

5．カテゴリーについて

1．「優しさ」派（36名）

この「優しさ」派に属する生徒たちをみてみると、自分の目から独断ではあるが、学年において1年間、リーダーとして活躍できた人の割合は、約20％と、他派と比べると圧倒的にその割合が高い。体育系部活動には71％の生徒が属している。そしてまた英語に関する成績も鑑みてみると、学年の英語の平均評定は、6.1と他派よりも随分とその成績がよい。評定平均が高いから「優しい」とは限らないが、この構成員は、全体的に、学校生活において、いわゆる、リーダーとして活躍でき、各学校、クラス行事においても統率力

を発揮した生徒が多くみられる。

2．「訓戒」派（25名）

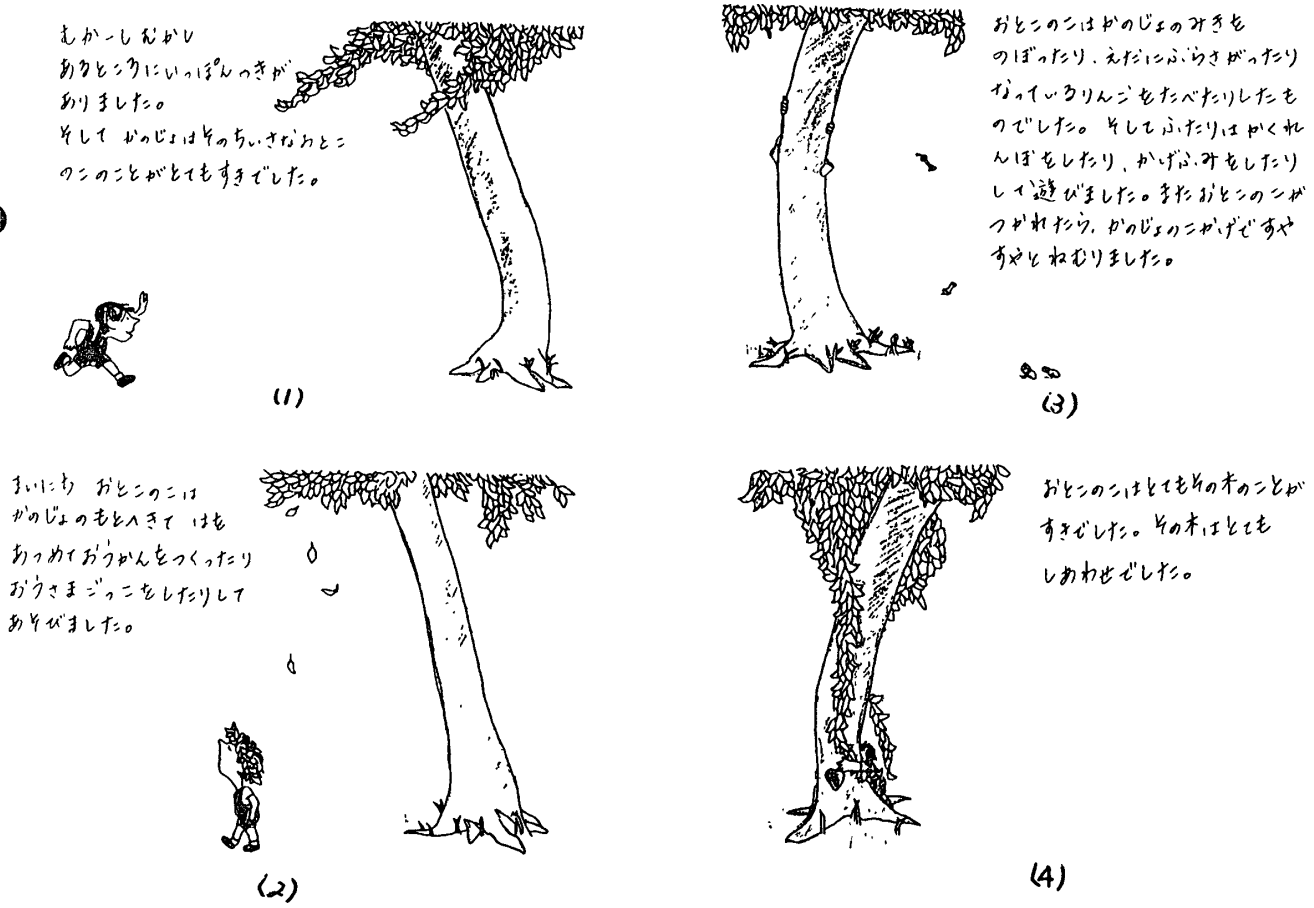
ここに属する中で、私がリーダーとして、名をあげれる生徒は全体の10％。「優しさ」派に属するリーダーの半数である。学年末の評定平均は5.8。体育系部活動には61％の生徒が属する。中でもこの派に属する生徒たちに関して、私個人の意見としては、内に秘めている自分自身の考えを持っている生徒が、多く集まっているのではないかと感じる。本（マンガを含む）をたくさん読む生徒が多く、自分の趣味といえるものを少なくとも、一つは持っている。ただし、その意見なり考えなりを全体の前に出すことはあまりしなく、またそれが得意ではない。

3．「自然環境」派（9名）

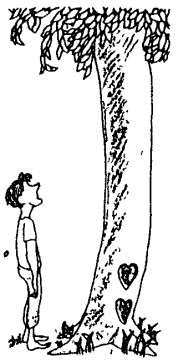
私に言わせれば、構成員は他に比べて少ないが、ここには、非常に特徴的な生徒が集まっているように感じられる。半数以上の生徒が、中学3年生の1年間に実際、リーダーとして活躍した実績を持っているし、ほとんどすべての学校、クラス行事にも、中心的な存在として貢献した。学年末の評定平均こそ5.5と振るわないが、9名ともに、学校の課外活動においても中心的な役割を演じている。「訓戒」派の生徒と同じように自分自身に考えをしっかりもっているが、「訓戒」派の生徒との違いは、その考えをある程度、全体の前で表現できる点である。正義感、責任感の強い生徒が多くいることも大きな特徴のひとつである。

総じて、私の独断をもって、各カテゴリーを分類、分析してみたので、多少の偏りがあるかもしれないが私の意見をもってまとめてみた。

6．生徒作業の具体例
タイトルは「ははなる木」



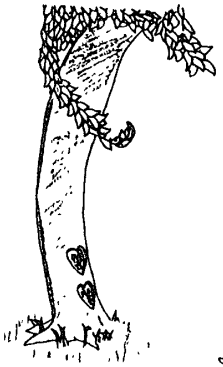
しかしときはすぐいき そのおとこのこも
大きくなりました。そのきはひとりぼっち
になることが多くなりました。
あるひ、おとこのこがきのところへきました。
きは「おいで、わたしのみきをのぼって
えだにぶらさがり りんごをたべて
わたしのかげであそびなさい。きっと
たのしいから」とおとこのこにかたりかけました。
「ぼくはきのぼりしてあそぶにはもうおおきい
んだよ。ぼくはおかねがものをかって
たのしみたい。ぼくはおかねがほしい。
ねえ ぼくにおかねちょうだい。」
とおとこのこはいいました。



(5)

「ごめんね」ときはこたえ
ました。「わたしはおかねをもって
いません。わたしにはりんごしか
ないのだよ。わたしのりんごをとって、
それをまちでうりなさい。そしたら
おかねをもらえてしあわせになれる
でしょう。」それをきいたおとこのこ
はきにのぼり りんごをとってかき
あつめはこんでいきました。
そして、かのじょはしあわせでした。

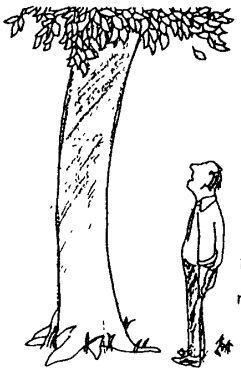
(6)



しかし、それからおとこのこはながいあいだ
きませんでした。きはとてもさみしくてかな
しみました。あるひ おとこのこはもどって
きました。きはよろこびのあまりからだを
ふるわせ、よろこびをあらわしました。
かのじょは「おいで、わたしのみきを
のぼり、えだにぶらさがったりして
あそびなさい。きっとたのしいから。」

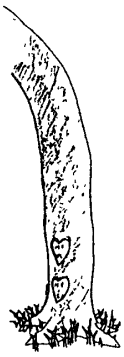
(7)

「わたしはいそがしくてきのぼりして
いるひまはないんだよ。」
「わたしはわたしをあたたかくまもって
くれるいえがほしい。」
「わたしはおよめさんがほしい。こどもも
ほしい。だからいえがひつようなんだ。
あなたはわたしにいえをくれませんか。」
とおとこのこはいいました。
「わたしはいえをもっていません。」
「もりがわたしのいえです。けれどもわたし
のえだをきり、それでいえをたてなさい。
そしたらしあわせになれるでしょう。」



(8)

おとこのこはかのじょのえだをきり
いえをつくるためはこんでいきました。
きはとてもうれしそうでした。



(9)

しかし おとこのこはながいあいだよりのきません
でした。そしてかれがもどってきたとき、かのじょは
うれしさのあまりほとんどくちがきけませんでした。
「ねえ、きみおいでよ」とかのじょはささやきました。
「きて あそぼう」「わたしはもうあそぶにはかなしい
ししをとりすぎた」とおとこのこはいいました。
「わたしはわたしをここからとおいどこかに
つれていってくれるふねがほしい。」
「あなたはわたしにふねをくださ
いませんか。」

(10)

「わたしのみきをきり ふねをつくりなさい」
ときはいいました。
「そしたら あなたはふねでとおいところへいけ
ますよ。それでしあわせになりなさい。」
おとこのこはかのじょのみきをきりたおし、ふねを
つくり、とおいどこかにふねにのっていってしまいました。
きはうれしかった…
ほんとうはそうでもなかったけれど。

(11)

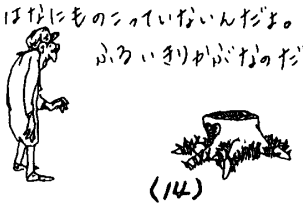
それからながいねんげつがすぎたあと
おとこのこはまたもどってきました。
「ごめんなさいね」きはいいました。
「わたしにはあなたにあげるものは
なにひとつのこっていない
わたしのりんごはもうありません。」
「わたしのはもうよわすぎてりんごは
たべられないのじゃよ。」
とおとこのこはいいました。

(12)

「わたしの えだは もう なくなってしまった。」きは いいました。
「あなたは もう ぶらさがることも できない――」
「わしは もう とし で えだに ぶらさがることは、
できんよ。」おとこの こは いいました。

(13)

「わたしの みきは もう ないのです。」きは いいました。
「あなたは のぼれない――」
「わしは つかれていて のぼることは できんよ。」おとこの こは いいました。
「ほんとうに もう しわけ ないねえ」ときは ためいきを つきました。
「なにか あなたに あげられる もの が あれば いいのだけれども、
わたしには なにも もの こっていない んだよ。わたしは ただの
ふるいきりかぶ なのだよ。ごめんなさいねえ



(14)

「わしは しまは もう あまり なにも いらない んじゃよ。」
おとこの こは いいました。
「ただ へいわで しずかな ところで すわって やすめる ところが
ほしい。わしは もう つかれた。」
「そう、それなら」とかのじょは できる かぎり せ もの ぼしながら
いいました。「それなら、ふるいきりかぶは すわって
やすむには さいこうの ばしょだよ。さあ どうぞ すわっ
て、すわって やすみなさい。」
おとこの こは そうしました。

(15)

そして きは とても
しあわせ でした。

(16)

7．おわりに

中学３年生の生徒と１年間、担任として、また教科担任として、付き合ってきたが、最終的に教科を通して、一人一人の生徒を再認識できたことをうれしく思う。“木”と“少年”の関係をとらえるさまざまな見方により、思ってもみなかった生徒から、驚くような意見が生まれたり、作業を通して触れあいの少なかった生徒と話がはずんだり、講義形式の中では、決して生まれなかった関係を作ることができた。

もし来年も同じ調査をしてみるのならば、本年度の反省として

(1) 作業の時間が２時間とはあまりにも少なすぎたこと。
(2) グループでの話し合いがスムーズにゆかず、色塗りに専念する生徒や一人に負担がかかり、他人任せにしてしまう生徒がいたこと。
(3) 完成作品をクラスで発表したり、クラスで意見をまとめることができなかったこと。

を改善し、本年度よりも、多くの調査報告ができるとよいと考える。そしてまた本年度の生徒の感じ方、考え方と比較してみたい。